No. 68
1985.
2. 15

岐阜の博物館

編集兼発行
〒501-32 関市小屋名
(百年公園内)
岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会
TEL(05752)8-3111(代)
振替 名古屋 6 37909

入館は団体でも、館内行動は〝個〟で！

国立民族学博物館長の梅棹忠夫さんが、「あそびの居なおり」として、博物館について、〈よく、こういうことをいってわらうんですが、博物館というものは、パチンコとおなじなんです。パチンコの盤面にむかって、一人一人の人間が真剣にとりくんで、対決している。それは、精神の火花とはいえないかもしれませんが、何か火花をちらせている。博物館は、それにひじょうにちかいもんで、われわれの精神と一つ一つの展示してあるものとの間に、そういう対決がおこなわれるんです。その意味では、博物館というものは、決して団体でワイワイガヤガヤとみるものではない。共同あるいは集団で対決するようなものでなく、きわめて孤独なものだというふうにわたしはかんがえています。孤独なるあそびの世界である。これがたいへん大事なことだとおもうんです。〉『わたしの生きがい論』講談社文庫P257～258，と述べていられます。全くその通りではないでしょうか。

100人～200人はもとより、たとえ40～50人の集団であるにしても、展示室を団体で見てまわることは、まず物理的にも不可能なことです。ひとりの解説員なりコンパニオン、学芸員なりが、展示品を案内できるのは、せいぜい10人までが限度なことは明らかなことです。ましてや、30～40人の集団で、30分なり1時間で、展示室を案内・解説してほしいとの希望を申し出られると、いったい何を案内・解説できるのだろうかと頭を抱え込んでしまいます。展示コーナーの解説文を読んで、いやタイトルだけに目を通して廻るだけでも30分やそこらは経過してしまいます。それくらいのことは、他人に頼り団体ごとゾロゾロ廻らなくても、個人でできることのはずです。何とも主体性のないことだとは思いませんか。それに展示案内とか解説とかは、バスガイドさんの説明や観光地のガイド説明とは全く異質のものです。通りいっぺんの解説内容を棒暗記していて説明することではありません。

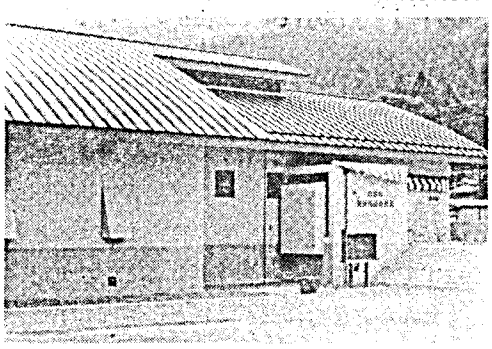
やはり博物館の展示見学とは、終局的には、〈パチンコのようなもの〉のはずです。個人の好みと関心、趣味に応じて、自らが主体的に、「もの」と対決する場です。展示解説は、見学者ひとりひとりの実態に合わせて、自己学習のお助けをする立場をくずしてはならないと思います。それだけに、学問的な深い背景，自らが研究者としての探究心に満ちた専門性をもつと同時に、教育心理学的な専門性が、解説者としての学芸員には求められているはずです。

博物館見学の第一歩は、学校なり子ども会なり、あるいは研究会、成人・婦人・老人学級等々の団体見学にあることは確かです。入館者数をかせぐには、博物館も団体見学の呼びかけを忘れることができません。だとしたら、団体入館者には、最大のサービスをして、「もの」と対決する楽しみ方をこそ知っていただく工夫をすべきです。入館は団体であっても、館内では「個」で行動できる展示見学の方途、補助教材の開発等を、館側も団体世話役側も、もっともっと考え実践すべきであると思います。（S.O）

館・園紹介 No. 63

白鳥町歴史民俗資料館

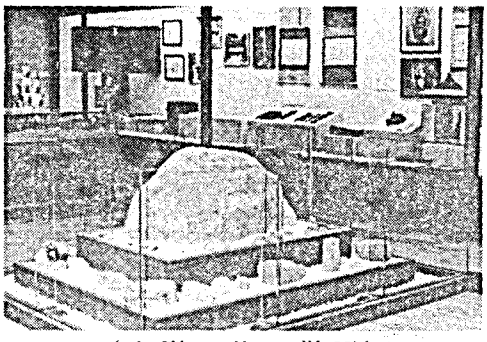
〒501-51 郡上郡白鳥町長滝自然公園内
TEL 05758－5－2663



（建物の外景）

白鳥町では、先土器時代，縄文・弥生時代，古墳時代などの遺物が早くから採収、発掘されています。名古屋大学考古学研究室による発掘、県文化課の指導による発掘調査等も行なわれ、縄文遺跡、弥生遺跡、古墳等の所在が明らかにされています。昭和59年11月に開館した当資料館には、発掘遺物の石器類、土器類、鉄器の代表的なものが展示されています。正面玄関を入り、左に展示室に向かうと、中央に目玉展示としてまず目に入るのが、珍らしい大型蜂の巣石です。縄文時代に、堅果類（クルミなど）を割るために、岩石にくぼみをつけて使用したものと推定されているものです。多孔石とも呼ばれているようです。

（白山信仰関係の展示）



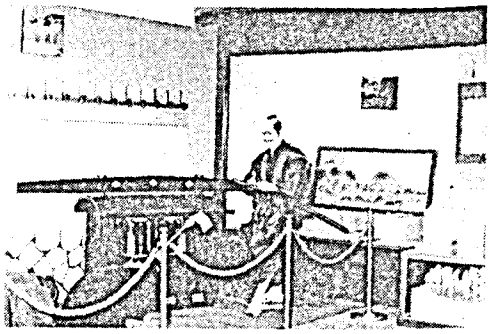
（大型の蜂の巣石）

考古資料展示に続いて、白山信仰に関するコーナー、そして近世における郡上宝暦金森騒動関係資料へと展示は流れ、「傘連判状」訴状の写し、若き指導者前谷村定次郎自筆の書状などがみられ、当時の農民の苦しみが伝わってきます。第２の展示室は、民俗資料が収蔵・分類展示され、奥濃越の先人の生活と、その英智の結晶に触れることができます。

研修のためのスペースも確保されており、古書、県下各市町村史等も備え、また江戸時代の村方文書の調査にも応える態勢づくりが進められています。さしあたり、本館として面積320㎡でスタートしたとのこと、今後の増築、関連諸施設の整備が進められ、博物館学的運営の推進されることが期待されます。

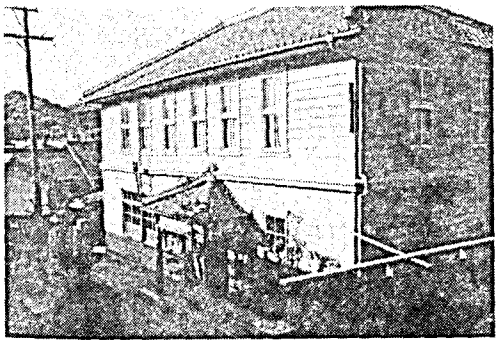
休館日は、月曜日、祝祭日の翌日、年末年始ですが、積雪の多い12月～３月間は、日曜日、祝祭日、土曜の午後が休館となります。入館料は大人100円，小中学生50円です。国道156号線沿いの便利なところですから、旅の往復路にぜひお立寄りになり、歴史と民俗に目を開いていただきたいものです。

（金森騒動関係の展示）



明智町郷土館・日本大正村資料館

〒509-77　恵那郡明智町1860-7
TEL　057354-3944（大正村役場）

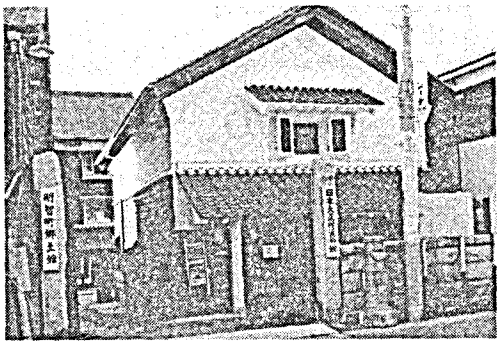


（大正村役場）

すでにマスコミを通じて、広く知られていることですが、明智町では、大正期の雰囲気を後世に伝える「日本大正村」構想が具体化開村しました。大正期に製糸業で栄えた頃の建物・街並が残っており、その街並は、現在も一般の住居であり歴史が息づいています。そうした大正の心・文化を後世に伝えていくとともに、明るく住みよい町づくりを目指して、街並の保存・整備を進め、町ぐるみを“生きた博物館”にしようとするもので、通称「銀行蔵」と呼ばれてきた建物が、明智町郷土館・日本大正村資料館・文化伝習館になっています。

銀行蔵とは、大正期に、絹糸の原料である繭（まゆ）を担保にしてお金を貸したときの繭の保存蔵です。郷土館1階には、農具・機織機、糸紡ぎ機、大工道具、2階には、考古資料の他経済、生活、教育、町政に関する歴史資料、大正村資料館には、古い時計、ラジオ、電話などのほか、目玉展示品として、古い蓄音器約100点が展示してあります。文化伝習館は、大正期の家具・調度品が配され、大正の雰囲気が醸し出された休憩所兼体験学習場で、糸紡ぎの実演・陶芸教室等文化の伝承・体験の場所として作られ売店にもなっています。大正村の開村とともに、これらは現在仮オープンとのことで、今後の整備・充実が待たれます。

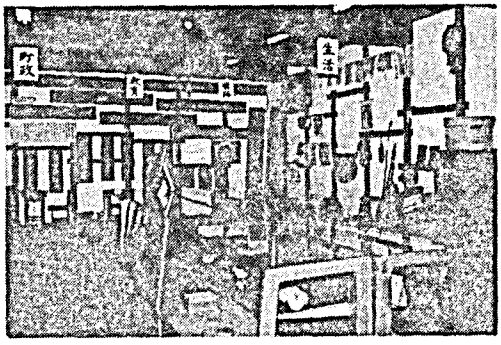
（大正村資料館内の展示）



（郷土館・資料館の正面入口）

別に古い建物をそのまま活用した「大正村役場」があります。まず最初に、この大正村役場を訪れること、係の方々の心暖まる全体構想、明智町大正村の見どころを教えていただいてから、町内各所の大正の名残りをとどめている街並散索と郷土館・資料館めぐりに出かけるといいでしょう。中馬街道・南北街道，大正路地，旧明智町役場八光館，日通明智営業所，元明智自動車会社，大正の街並うかれ横丁とカフェ、などが見どころです。大正村実行委員会が結成されており、官民一体となった地域の博物館づくりの先例といえます。

（明智町郷土館内の展示）



博物館学習の実践

6年生の歴史学習

松枝小学校　西脇康雄

岐阜県博物館の人文展示室Ⅰの中には、岐阜県の歴史的な年代順展示がなされている。この展示物を利用した歴史学習を行うことによって、子ども達は、自分達が住んでいる岐阜県全体の立場に立った歴史的見方・考え方ができ、五感を働かせての学習が可能である。そして、文化遺産に対して意欲的追求が行われ、実感的・具体的に歴史をとらえることができるようになるものと考えた。

1. 意欲的追求が行われるために

> ぼくは、社会の授業で石ぼうちょうを作ったことがあります。やっとの思いで、やわらかい石をコンクリートでけずったのです。昔の人はかたい石をどうやってけずったのか、岐阜県ではどんな石器が出土したのかなど見たり、調べたいです。　（6年・H男）

このようにすべての児童に意欲的追求態度をもたせながら、次の2点に留意して進めた。

(1) 「地域」と「文化遺産」との関連を大切にする。

今まで学習した所、今後学習する所で、「岐阜県にはどのような文化遺産が残っているのだろう。」等、地域と関連した疑問が、子ども達の中からわいてくるのは自然である。このような研究問題を取り上げ追求させる。

(2) もの（展示物）を実際に見たり、ふれさせたりする。

子ども達が、ものを見たりふれたりしたときに受ける驚きや感動を大切にすることによって、そのものの持つ意味や働きを追求しようとする意欲を子ども達に深めさせる。

2. 実践の概要

学習はあくまでも子ども達が、見たい、調べたい、考えたいというものでありたい。そこで今まで学習した内容、これから学習する内容を含め、どの時代のどのような内容に興味・関心を持っているのかを調査した。

1人1人の研究問題を博物館において解決するのが理想である。そこで、調査結果をもとに博物館の展示内容、追求可能かどうか等を博物館の学芸員と打ち合せを行った結果、4つの時代にグループを分け学習させることにし、下記のように学習内容の構成を図った。

博物館学習の流れと学習内容の構成表

学習の流れ	各時間のねらいなど		
オリエンテーション（1時間）	各時代ごとにグループ分けし、研究問題を決定する。		
事前学習（1時間）	各研究問題に対して予想を持ち、グループでの考えをビー紙にまとめる。		
館内学習（2時間）	時代	単元名と展示物	ねらい
	先史時代グループ	日本の国のなりたち（洞穴のくらし）	九合洞穴，龍門寺古墳の様子を見て、その時代の人々の生活について考えさせる。
	奈良時代グループ	貴族の世の中（美濃国分寺）（美濃国分寺の映画も併用する。）	仏鉢，国分寺を中心に美濃と中央とのつながりについて考えさせる。
	江戸時代グループ	武士の世の中（村のくらし）	郡上一揆を取り上げ、その当時の農民のくらしについて考えさせる。
	明治時代グループ	明治からの世の中（教育のうつりかわり）	「日本の近代化」への歩みを教育の移り変わりとかかわらせて考えさせる。
事後学習（1時間）	自分達の発表内容を教え合い、さらに残った問題点を整理する。		

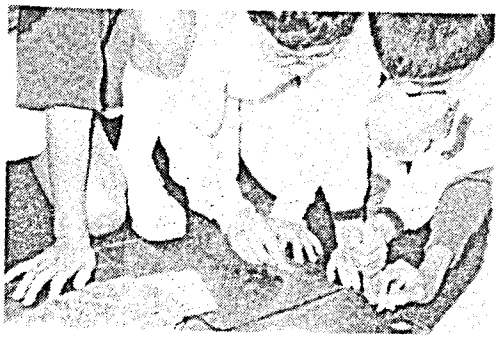
館内学習では、各グループがそれぞれの展示物コーナーの前で学校教師を中心に学習を行っ

た。以下、明治時代のグループの実践を具体的に述べる。

3. 館内学習の例（明治時代のグループ）

明治時代から現代までの教育の移り変わりの展示を見ると、「おもしろい幻燈機やなあ。木で作ってあるけれど、本当に映ったんやろか。」「石板って書いてあるのは何に使ったものだろうか。」等、どんどん疑問がわいてくる。これらの疑問はものと正対したときに感じたもので、調べたりしている時には出てこないものである。そこで、実際に、石板に字を書かせてみた。

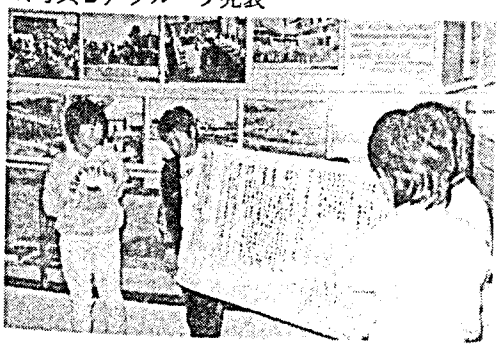
（写真１）石板に字を書いているグループ



「結構重たいな。こんなものに字が書けるのかなあ。」「石ぼくが折れてしまった。すぐ折れるもんだなあ。」「今はノートに鉛筆を使って簡単に書けるけれど、昔は大変だったんだ。どんな具合に使っていたのかおじいさんに聞いてみよう。」

実際に展示してあるものにふれた時の反応である。子ども達は、そのものの持つ意味を五感を通して追求することによって、さらに新しい研究問題を作り考えていこうとする意欲がみられた。

（写真２）グループ発表



自分達がものにふれたりしてわかったことや感じたことを、下調べがまとめてあるビー紙に書き加え、グループごとに発表をしていく。その発表を聞きながらさらにわからない所や考え方のちがい等の意見を出し合いより深めていくという活発な活動が見られた。

「私たちのグループは、『明治時代にどのような教科書や教育に関する機械などが使われていたのか』という研究問題について調べました。展示されている教科書を見ると、やはり私たちが調べてきたように兄や姉から弟や妹に順々に渡されていった印（しるし）が残っていました。とても大切に使われているようでした。

石板にはとってもびっくりしました。私たちは鉛筆を使って紙に書けばいいし、クレパスなどを使えば色々な色が出せます。昔の人に比べるととっても幸せだと感じました。」

この発表から、子ども達が事前に研究問題について調べてきた事を土台にして、博物館にある展示物を自分の目で見て、新しい発見をし、より確かなものとしていったことがわかる。さらに、全国的なでき事でも、他の県のでき事として歴史的事象をとらえがちな子ども達に、岐阜県でも同じようなことがあったのだということが理解された。

4. 今後の課題

紙面の都合で、４つの時代の学習についてすべてをここに述べることができなかった。

今回の場合、博物館に来る前にあらかじめ研究問題を設定し、予想をたてある程度調べ学習をしてきている。この場合、子ども１人１人の意欲的追求を館内で十分させるため、ものと正対した時に出てくる疑問を大切にして、自らが、館内でその疑問を解決していく方法を考える必要がある。それと共に、学校教師中心で館内学習を進める方法のほか、博物館教師とペアで授業を構築する教授法の開発にも、今後取り組んでいきたい。

半原版画館をつくって (1)

糸魚川 淳 二

瑞浪市化石博物館をつくることにたずさわってから10年以上もたちました。初めは何も知らなくて、ただやみくもにやっていただけでしたが、だんだんに博物館が面白くなって来、あちこち旅行するたびに見てまわり、さらに興味を覚えました。特に、1974～1975年の、ヨーロッパでの一年では、博物館を十分に楽しむことができました。

一方、博物館について、あきたりないこともたくさんありました。行政的に、思いつきや記念碑としてつくられ、博物館の本来の使命や活動を忘れた運営がされていると、腹が立って来ます。よい博物館を、正しい博物館運営を、そんな思いをこめて、本（博物館だより，博物館を考える）を書き、いろいろな機会に意見を述べて来ました。

しかし、これはそんなことで解消する問題でないことがわかって来て、最近では、「博物館はどんどんできた方がよい」とか、「その内にはちゃんと運営されるだろう」などと思うようになって来ました。一方、心の中では、「何か間違っている」、「きちんとつくり、正しい運営を」と思い続けて来たことも事実です。

「博物館はものと人」というのが私の持論です。その「もの」が20年来の収集の結果として私の手元にコレクションとなりました。砂目石版画です。石版（リトグラフィ）は、18世紀の終りに、ドイツのミュンヘンで発明されたもので、版画や印刷に使われる平版の一つです。

日本へは江戸時代の終りに印刷機が輸入され、明治の初めに、あちこちで石版画がつくられるようになりました。初めは本のさしえ、地図などが中心でしたが、やがて、錦絵（浮世絵）に代る額絵として、「庶民の絵」の道を歩き始めます。明治10年代の後半に増え始め、20年代前半（1890年頃）に全盛をきわめます。

もともと手刷りで、ていねいにつくられたものは大変見事で、技術の高さをうかがわせます。後年になって、機械刷りとなり、多色刷も行われますが、質が落ちて来ます。それでもほそぼそと、大正・昭和まで続いていました。

たまたま読んだ一冊の本（岩波新書「版画」）と、名古屋の古本屋で手に入れた一枚の美人の砂目石版画（石の版面に砂目をたてて — ざらつきを作って — 刷るので、こう呼びます）が、私にこの画の収集を始めさせました。

調査や学会で出かけるたびに、こまめに古本屋をのぞき、古道具屋を探しました。昭和35年ごろ、私の小遣いで買える位に、値段も安かったのです。足でかせいで20数年、その数は2000枚を越えました。玉石混こう、素晴しい、ほれぼれするものから、紙屑同然のものまで、いろいろですが、数だけは何とか、コレクションと呼ぶだけのものになったのです。

妻の方は、使えるもの、眺めて楽しいものを中心に、食器や道具を集めていました。明治・大正の、ガラス器・漆器・そば猪口などです。他の人が集め出して値段が上ると、収集中止で他のものへ、というのですから数はふえませんが、楽しい日常雑器がかなりの量になりました。

こうなって来ると、博物館に結びついて来ます。理想的な博物館をつくってみよう、というわけです。「もの」があり、「人」がいます（一

寸厚かましいですが)。やれないわけはないのです。ただ、普通は割合問題のない、「いれもの」(建物)がないのです。建物をつくるためのお金の算段をしなければならないのです。

二人でいろいろ考え、意見が一致し、ゴーとなりました。貯金をはたき、借金をすることにしました。それでは場所はどこがいいか。東濃のうちで、生れ故郷の恵那郡坂下町から、化石博物館で縁の深い瑞浪市までの間と決め、土地を探し始めました。できたら借りようという決心です。坂下町・中津川市、そして瑞浪市のあちこちに候補地がありました。

結局、現在の、瑞浪市日吉町半原になりました。半原文楽人形保存会の会長さん、三輪省三さんのご好意で借りられたこと、まわりが雑木林で、自然のふん囲気がよいこと、交通の便もまあまあという所、などがその理由です。

建築は瑞浪市の野平木材へ頼みました。化石博物館の設計をされた野平統一郎さんの会社です。担当は若い気鋭の後藤　博さんです。

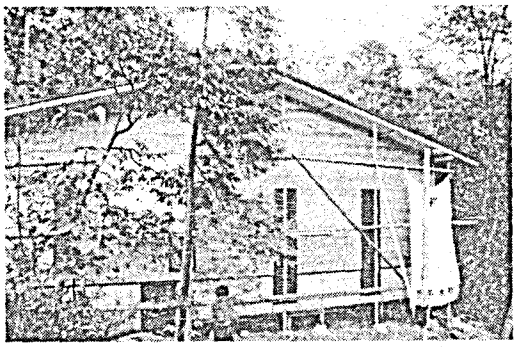
何度か図面をかきなおし、設計ができ上りました。約165㎡、木造平屋建で、約半分が展示室です。敷地が斜面なので、床を2段にし、短い階段でつなぎました。展示を分けるにも、一つにまとめるにも便利です。

7月初めに棟上げ、一番の楽しみの餅投げは残念ながら雨で中止となりました。梅雨の真最中ですから、仕方のないことでした。

工事は順調に進んで、12月末(1983年)に完成しました。展示室の照明や内装などについては、やはり化石博物館以来のおつきあいの、丹青社の里見親幸さんの知恵を借りました。プレーンな、明るい感じで、外光も十分入ります。

去年の冬は寒波襲来で大変でした。雪は降るし、凍るし、初めてのことでてんやわんやでした。やがて春のきざしが見え出した頃、展示の準備を始めました。

まず、絵を選ぶことからです。最初だから張切って秀作を選びました。画題や時代なども考慮しての砂目石版画30点、多様な技法の現代版画18点です。マット切りは自分でやることにし



ました。経済的なこともありますが楽しいからです。冷え切った展示室の中で、夜おそくまで二人の作業が続きました。

オープンは1984年の4月1日(日)に決めました。山里の半原にも春がやって来て、木の芽が吹き出す頃です。最初は1週間開いて、後は隔週に4日間、1・2月は休館と決めました。パンフレットができ上り、展示も完了しました。いろいろな、こまごました準備がありました。華やかなことは一切抜きにしたのですが、どのくらいの人が来て下さるのか、見当もつかなかったのです。

テレビや新聞でも報道してもらって、大変なことになりそうな予感がしました。案内をさし上げた方々からも反応がありました。瑞浪の若い友人たちが、いろいろ手伝ってくれて、準備万端OKといった所です。

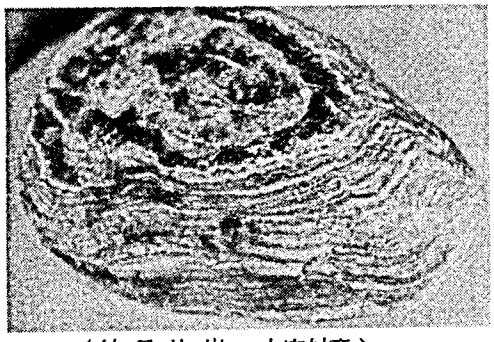
オープンの日、足の踏み場もない程でした。約300人、午後の4時間の間に、このスペースにこの人数はキャパシティを越えていました。東京から、上田から、名古屋・神戸などから、知人が来て下さいました。地元の方はもちろん、見知らぬ方々が遠くから足を運んで下さいました。お年の方から子供まで、いつも静かな半原の里に、話の、笑いの声が響きました。「始めてよかった」、これが実感です。

その後、来館者は続き、9ケ月で1600人を越えました。初めの予定より多い数です。一区切りついて、ほっとして、次の準備を、と思っている所です。その間の様子は、次の機会にお伝えしたいと思っています。

県内ニュース

県博 資料紹介展 ふるさとの大地をつくる岩石

岐阜県は日本列島の中で、岩石の種類が多い地域です。県内各地から収集した岩石約120点を、単に種類別に分類展示するのではなく、今回は地史とのかかわりで紹介します。岐阜県の

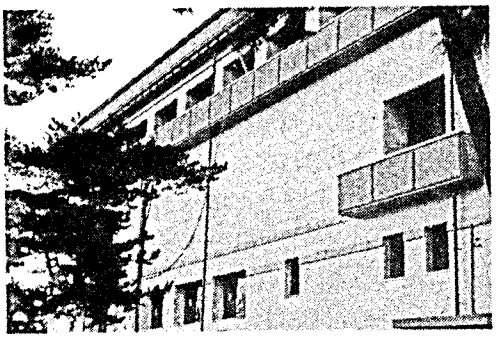


（結晶片岩　上宝村産）

基盤岩として、「飛騨帯の岩石」「飛騨外縁帯の岩石」「美濃帯の岩石」「領家帯の岩石」基盤をおおう岩石として「手取層の岩石」「白亜紀の火山岩」「白亜紀～古第三紀の花こう岩」「新第三紀の火山岩とたい積岩」「第三紀～第四紀の火山岩」などのテーマによって全体が構成されています。

期間は2月10日～4月7日まで、通常の入館料のままで見学できます。ふるさとの大地の岩石は、いつのころにできどんなものがあるのでしょうか。春休みの家族ぐるみの行楽等にもぜひご計画ください。

岐阜市歴史博物館（仮称）着々と準備進行



今秋11月オープンを予定されている岐阜市歴史博物館は、外装工事も完了し、その偉容をみせています。玄関ホールの内装目玉展示である縦3メートル、横4.2メートルの信楽焼陶板、「細見美濃国絵図」（江戸末期の絵図）、及び古代のかわらを再元した幅2メートル、高さ5メートルのレリーフも完成し、二階には、長良川の鵜飼を具象するステンドグラスのとりつけ作業が始まっています。いよいよ展示準備にも力が入り、公立の大規模博物館の誕生だけに、秋の開館には大きな期待が寄せられています。

穂積町民センター 民俗資料を収集

同町では、広報などを通じて、町民の方々に民俗資料収集を呼びかけています。農機具、養蚕、染織、竹細工、衣食住、牛馬具、交通、道具、信仰など、かつての生活を示す資料全般を収集・保存し、さしあたりは町民センターロビーで展示を行ないます。将来は、歴史資料館の建設をめざしての事業で、都市化の進展とともに、歴史民俗資料が急速に失われている昨今だけに、緊急を要しまたその成果が期待されます。

編集後記

◎化石学者であると同時に、博物館学の理論と実践の第一人者、名大の糸魚川淳二先生にお願いして、今回に引続き、次回では開館後のあれこれ、来館者の反応あれこれをご執筆いただける予定です。個人館園の絶対数が多い県下の博物館界にとって、半原版画館は、ひとつの指針・モデル館になることでしょう。

◎先号の青木理事長の呼びかけに応えて、学芸活動の実務的な研修・研究交流の場づくりの必要性の声が寄せられています。具体策が出されましたら、関係各位の参集が望まれます。

◎博物館を活用した学校教育のすばらしい実践報告を載せることができました。県下各校が、こうした博物館利用上手になっていただけることが望まれます。（S.O）